四国開発の先覚者とその偉業

11 四国の捕鯨・水産業のパイオニア 讃岐の生んだ海の先覚者－藤川三渓（ふじかわさんけい）－

1．生い立ち

文化13年（1816年），現在の高松市三谷町に生まれた藤川三渓は，高松藩の儒学者であり，医者であり，武芸にも優れ，幼年時代には神童と呼ばれるほどであった。しかし家庭的には恵まれず，母は生後間もなく世を去り，父もまた三渓が16歳のとき，43歳で亡くなった。

胸を病んでいた父親の南凱は，病床にありながらも，枕元で看護する三渓に様々なことを教え諭した。それは長い間ではなかったが，病苦を押しての父の教訓は三渓の心の奥深くにまで染み込み，生涯忘れることはなかった。

藤川三渓　肖像画
〔写真提供：藤川三渓顕彰会〕

2．高島秋帆との出会い

天涯の孤児となった三渓だが，不幸に屈することなく，すすんで高松藩の学者である中山城山に入門し勉学に励んだ。一方で，剣道や槍術を修め，18歳の頃には既に頭角を現し，射撃の術にも熟達した。文武両道を会得した三渓は早くから識者に認められ，儒学を講ずるかたわら家業の医術研究を怠らず，多くの人を診療し，特に庶民の間では大きな信頼を得た。

当時，世の中の流れは刻々と移り変わり，鎖国がようやく破れようとしていた頃である。移り行く天下の形勢を察知した三渓は新しい希望に燃え，天保12年（1841年）26歳の春，九州長崎で学ぶことを決意した。

長崎に着いた三渓は，すぐに西洋砲術の第一人者で，又進歩的思想の持ち主であった高島秋帆（たかしましゅうはん）の門を叩いた。秋帆は初対面で三渓が非凡な人物であることを見抜き，三渓が時代の趨勢を広く見渡し，遠く自分のところへ教えを求めに来た熱意に感じて，直ちに師弟の約束を交わした。以来，懇切丁寧に指導し，秋帆自身が親しく教えを受けたオランダ人ニーマンの説である，捕鯨が漁労の基本であること，遠洋漁業に必要な知識は捕鯨によって会得できること等を説明し，我が国水産業発展のため，大いに捕鯨事業を重視すべきであると力説した。

当時，近海捕鯨地として有名な肥前五島浦において，秋帆独特の砲術を利用した「銃殺捕鯨法」を実際に行なってみせ，捕獲した鯨を自ら作った鯨納屋（くじらなや）で処理し，いかに捕鯨事業が有利であるかを実証してみせた。

秋帆の眼に狂いはなく，当時，一青年学徒に過ぎなかった三渓は，後年，恩師から指導を受けた新知識を活用し，水産王国日本の基礎を築き，その期待に報いたのである。

明治維新前後，三渓は数多くの勤王の志士た

ちと交流を深め，奥羽征討に参加するなどの功績を残し明治新政府の下で働いたが，まもなく野に下った。

３．捕鯨の事業化計画

高島秋帆の下で，四方を海に囲まれた我が国発展の道は水産業にあり，その中核をなすのは捕鯨事業であることを教えられ，その機会が来るのを待っていた三渓は，維新の風雲がおさまる頃，理想実現のための第一歩を踏み出した。

明治５年（1872年）三渓はまずアメリカ人２名を雇い，さらに約30名の漁夫を募って秋帆直伝の洋式捕鯨法を習得させ，続いて翌６年４月，外務省に建白書を提出して小笠原諸島の開拓並びに同島付近における捕鯨事業の計画を立てた。この計画は捕鯨を事業化しようとしたもので，かなり大がかりのものであったが機熟せず，実現するまでに至らなかった。しかしあくまで初志貫徹しようとし，さらに同志と共に捕鯨事業を目的とする捕鯨社（のちに開洋社と改めた）を設立した。

しかしこの三渓の捕鯨計画にはかなりの非難があった。現に，三渓が小笠原諸島開拓と捕鯨の許可を願い出たとき，房総の漁民たちは，近海で捕鯨をやられたらイワシ網の妨げになるという理由で禁止を要請している。これは漁民が，三渓の行なおうとする銃殺捕鯨法を知らず，在来の網取り法だと考えていた認識不足からで，このことからも当時の国民の捕鯨に対する知識がいかに乏しかったかがわかる。その啓蒙運動からやらねばならなかった三渓の苦心がしのばれる。

４．捕鯨方法の変遷

我が国の捕鯨方法は，時代の移り変わりと共に変遷し発展してきた。

第１の方法は，太古から元亀・天正（1570～91年）の頃まで行なわれた弓取り法で，これは弓矢を使って捕る。

第２は銛（もり）で突いた突取り法で，慶長時代（1596～1614年）から延宝時代（1673～80年）までの約100年間続いている。銛によって初めて鯨の体と船との連携ができ，この方法が行なわれるようになってから捕鯨が事業化され経営されるようになってきた。

第３の方法は，銛の他に網を合わせ用いる網取り法で，延宝時代（1673～80年）から明治20年代（1887～96年）まで200年余り続いた。銛だけでは捕ることが困難だったザトウクジラの捕獲に成功し，大きな利益を得ることができた。

従来，日本の近海には，セミクジラやコククジラの来遊が多かったが，それがだんだんと減少し，これに反してザトウクジラの来遊が多くなってきた。しかしザトウクジラの捕獲はとうてい今までのような突取り法では不可能であったことから，網取り法が発明され，たちまち紀州から土佐の室戸，津呂に，さらには九州大村にまで伝わり，しばらくして順次全国的に普及して日本各地の捕鯨場における一般的捕鯨法となった。

第４の方法は，銛にボンブランス（爆弾鎗）を併用して捕鯨し，母船上で鯨油をとるアメリカ式捕鯨銃による捕鯨工船採用の段階で，我が国では明治27年（1894年）初めてこの方式が採用された。

第５の方法は，銛を大砲で発射するノルウェー式捕鯨法で，我が国では明治32年（1899年）から始まった。母船上で鯨の処理をする捕鯨工船採用の現段階のそれである。

以上挙げた５つの方法が，日本捕鯨の発展段階のあらましである。

ここでひとつ付け加えておくことは，日本の民間で初めて捕鯨砲をつくったミロク製作所（南国市）の弥勒武吉（みろくぶきち）氏のことである。

武吉氏は明治23年（1890年），高知県香美郡

野市町（現・香南市野市町）の鉄砲鍛冶の家に生まれた。小さい頃，父親が先込め銃の村田銃をつくるのを手伝ったのがそもそもの始まりである。

「大正時代に捕鯨会社から小型捕鯨砲の製造の依頼があった。その当時，捕鯨砲は砲兵工廠だけでつくっており，民間では全くつくっていなかったが，砲兵隊にいた経験が役に立ち，どうにか苦心して捕鯨砲をつくりあげた。」と，後年述懐している。

弥勒武吉氏も四国の生んだ先覚者の一人である。

5．三渓と辰子夫人

三渓はずんぐりした体格で，眼光鋭く，みるからに容易に人に許さぬ，おのれの信ずるところは一歩も譲らない剛直の面が多分にあった。そのため，とかく人から敬遠され恐れられがちでもあった。しかし内には優しい気持ちを持ち，いわゆる世の中の弱者に対する思いやりの心は特に深かった。

三渓の東京の自宅にはいつも20～30人の書生が世話になっていた。いずれも貧しい青年で，三渓は私財を投げ打って彼らの面倒を見，辰子夫人もこれら多くの居候を養うため，家計のやりくりはもとより，毎日忙しい思いをしたという。ある冬の日のこと，三渓は外出先の路上で餓えと寒さで震えている乞食に出会った。彼は惜しげもなくありったけの金を渡したうえに，自分の着ている羽織まで脱いで与え，そのまま帰宅して夫人を驚かせたという逸話が伝わっている。

他人に対し深い情を持つ三渓は，自分の子供達に対しても溢れんばかりの愛情を注いだ良き父親であった。生後間もなく母に死別し，16歳で父の死に会い，天涯の孤児となった三渓にとって，家庭の温かみ，肉親に対する愛情は，何物にも代えがたい尊いものであったに違いない。

辰子夫人も三渓に劣らぬ優しい典型的な日本女性であった。暇があると出かけ，貧しい人々に食品を恵んで回ったという。人の知らないところで善行を行なう婦人として，当時の新聞にたびたび紹介された。

6．水産学校設立

明治17年（1884年），72歳の時，水産立国の意志は益々固く，事業の発展の要は人を得ることにあるという観点から，大日本水産学校の設立を計画し，認可が下りるとすぐに校舎を設け直ちに授業を開始した。水産人として必要な教科目を網羅したこの大日本水産学校こそ，我が国水産学校の起源である。

しかし時機尚早のため，残念なことに入学志望者が極めて少なくて経営不振に陥り，創立後わずか５か月後に廃校となった。しかし，意気込み盛んな三渓は，東京の水産学校を閉鎖するとすぐに大阪へ飛び，再び大阪水産学校を設立した。生徒10数名を相手に熱情を込めて指導し，毎日を楽しく送っていた。このときの教科書は自著『水産図解』を使った。

『水産図解』は三渓の名著で，淡水魚81種，海水魚157種，貝類168種など総数約450種に及ぶ魚介類・海草等について，和漢の水産関係図書を広く調査して編纂し，すべての挿画を自分で描き，産地・形態・性質・味覚などを略述してある。我が国水産史上非常に貴重な文献で，その精細さに驚嘆する。

（『水産図解』　高松市歴史資料館所蔵）

７．結び

三渓が逝去してから120年たった今日，彼が心血を注いで啓蒙に努め，念願とした水産王国の礎石はしっかりと築きあげられ，その上に立った我が国産業，経済の発展は，世界の注目するところとなっている。その遺業は，きらびやかに現代に生き輝いているのである。

幼いときは勉学に励み，長じては勤王の志士たちと交わり，そしてまた野に下っては，自ら水産学校を創立して水産人育成の任にあたり，さらには捕鯨事業を計画し実施するなど，藤川三渓は，身をもって理論と実践を示した大いなる開拓者であった。

以　上

（担当：菊池）

※　本編は，渡辺茂雄氏著「四国開発の先覚者とその偉業」（昭和39年～42年，四国電力㈱発行）を原典に編集しています。